



※ 報 會 樹 葉 針 ※

通 卷 第 八 十 八 號

九州から北海道へ

近 藤

昨年正月には九州から蔵王山へと出かけたが、今度は更に一步を伸ばして北海道へと出掛けた。仲間には云はすと知れた吉澤、村尾兩氏三人水入りの旅である。

既に東京に出るのさえ、現在の私には相當の苦勞があるのですが、滯京數日にして北海道に旅立つと云ふ事は、親戚の總てを東京に持つ小生には難事中の難事である。特に昨年暮から直ぐ上の兄が大患をやり、一時危篤に迄なつた矢先なので、容態が良くならなければ到底北海道へ行くなんて事は出来ない。

今度は蔵王山の時に懲りて、如何なる事をして寝台券を手に入れる事にして、三人して色々あらん限りの智慧を搾つて見たがどうしても駄目。到々九郎ちゃんに泣きついて、全く變な筋から二枚手に入れて貰つた。大体三人とも、他人に苦勞して貰つて手に入れ様と云ふ、心掛けがよくない連中なので、徒らに机上作戦に耽けるのみで手を出さうとせず、わい／＼云ふ丈なんだから心細い事甚だしい。

熊さんは自分の分丈一枚何處からか手に入れて、獨り涼しい顔をして居る。三人して相談さ云つても、眞剣になつて居るのはペンちゃんさ僕の二人で熊さんは一枚の寝台券を懷深く隠して「一寸見せて御覽」と云つても取られるかと思つて仲々見せてくれない。

九郎ちゃんからの二枚の寝台券は「地獄の佛」さも云ひ度い處。それが出發の當夜發車のベルが鳴つて居るのに、寝台券の所持者たるペンちゃんが現はれないのだから全く何んぞ申して良いやら!! そして汽車は遠慮なく時間通り上野驛を滑り出してしまつた。

寢台車の中で、其夜は熊さんの處に一緒に寝かして貰ふつもりで我ん張つて居るさ、土浦驛で「ヒョッコリ」ペン公が寢台車に這入つて來た。癢に觸つて仕様が無いが、ベンちゃんを持つて居る寢台券が目の前にチラ／＼して途ニコ／＼顔になつてしまう。話を聞くと、間一髪満員の列車に飛乗つたが中にも這入れず、土浦驛迄吹き捲る寒風に身を晒りして居たそうさ。ベンちゃんがスキーを持つてリュックを背にして、デッキにしがみついて居る形なんて考へて見た丈でも面白い。

× × × × × × × ×

青函連絡船の二等船室に納まつた三人は、先ず食堂に飛込んで殊に熊さんの希望に依り洋食を攝る。船は相當に荒れて、到々熊さんは折角食べた洋食を出してしまうさ云ふ始末。

それでも、上甲板から雪に蔽はれた北海道が見え出すと元氣回復。

函館の連絡も要領第一さ云ふ處で、三人して良い場所を占めてやれ／＼。

列車の中で、陸軍の準尉殿から「オゲサン」と呼ばれて、三人ともすつかり面喰ふ。呼ばれた相手は誰か、是れは熊さんである。

札幌驛では奥野氏夫妻、芳賀氏の出迎えを受けて圓山の芳賀の店に立寄り、奥野氏宅へ行く。今夜は大晦日である。年の暮に大變な客が舞ひ込んだものだ。奥野氏には一寸さ何んでも無いが奥さんには氣の毒で仕様が無い。

× × × × × × ×

明けましてお芽出度う御座います。

舊年中は色々御世話様になりました。本年もどうぞよろしく。

× × × × × × ×

本日は奥野氏、赤堀氏、芳賀氏の案内で札幌附近のスキー場見物に出掛ける。全く素晴らしい雪と云ふ一語に盡きる。

私には北海道は十二年振り、北海道の冬を見るのは實に二十五年振りである。餘り永い間見ぬので、故郷の山川は全く他國の空の様な寂しい氣持がしてならなかつた。

特に札幌は私の生れた處だが、町がすつかり變つてしまつて、私の胸に浸み込んで居る札幌とは似ても似つかぬ處となつて居た。

今井デパート 三越なんて建物は私の記憶には無い。二十五年間見なかつた雪の札幌、これが私の生れた町か何遍考へ直して見ても、思ひ當る處が無い。全く他國の町だ。

「去る者は日に疎し」と云ふ言葉を、此の札幌に結びつけて見たりした。

最早私の故郷は札幌では無くなつて居るのです。「育ての町」東京こそ私の本當の故郷ださつ／＼考へさせられた。

× × × × × × ×

昨夜札幌鐵道局の人の好意に依り、寢台にぬく／＼と寝て、午前二時一寸過ぎに石北線安足間驛に下車。直に馬場で愛山溪温泉に向ふ。

行程二十一軒、物凄く寒く到底乗つて居られず、時々飛下りて歩く。歩いて居る方が餘程暖かい。

根松、蝦夷松の原生林を潜つてぶら／＼歩いて午前十一時頃温泉着。

此の温泉は此の山間に只一軒しか無い氣持の良い温泉である。薪は實に豊富で、戸外は零下何十度でも部屋の中はボカ／＼して居る。

午後は沼の平附近迄上る。愛別岳が永山岳の尾根を距て、實に奇麗に聳えて居る。夕方より吹雪になつてしまふ、然し雪は飽く迄軽い。

此の沼の平より三十三曲りの滑降は、到底孫さんの形容を借りれば表現出来ない。

X X X X X

本日は此の温泉の主人とも云ふ可きガイドの田中友之助と云ふ人を案内にして、旭岳に登るつもりで張り切つて居た處、吹雪の爲め駄目になり落膽した。

如何にも残念なので、此の人を案内にして吹雪の中を愛別岳下の尾根迄行つて見る事にする。此の途中白川谷を渡つてから、愛別岳の尾根筋迄約三百米の急斜面は是亦比類稀なるスキー場で、實に何んとも申し様の無い斜面である。

斜面は相當急で、三人登つた其の後から登る僕のスキーが三人のシェブールを崩して、スキーが一尺位どうしてもすり下るのでとても苦心する。處が此の斜面を下る時には、僕のスキーはエツサが既に磨減つて居るので、一回ボーゲンをする大量の粉雪と一緒に大分下に流される。熊さんに云はせるさスキーは廻り過ぎて困つたそうだ。

午後は又三十三曲りを上る。

すつかり疲れて温泉に浸つたが、折角の旭岳に登れなかつたの

で何んさなく面白くない。明日天氣だつたら一日下山を延ばして登る事に決める。

X X X X X

矢張り天氣は面白くない。到々諦めて下山に決める。下り二十一軒は随分つらかつたが、兎角無事當夜は札幌奥野氏宅に落付く事が出来た。

明れば五日、奥野氏案内にて札幌岳に登りに行く。定山溪温泉にて下車、銚子口と云ふ處を通つて行くさ、突然二人連れのスキーヤーが熊さんを捕まえて「無意根山はこちらの方へ行くのですか」と聞いて居る。

「そうです」と熊さんは平氣で答えて居る。地圖も持たずに山に登りに行くスキーヤーは内地ばかりでは無い。雪の北海道にもあるのだなあさ、つく／＼感心もしたり、あれで途中で吹雪でもあつたらコロリとやられてしまふ。

處が奥野氏に云はせるさ「あんな連中は決して山へは登らん。大抵無意根小屋迄だらう」と云ふ事だ。

冷水澤に這入るさ急に傾斜がついて、歸りは面白からうと思はれる。

冷水澤スキー小屋にて少憩後頂上へ向ふ。八合目位は實に雪の樂園とも稱す可き處。

根松の美林を縫つて滑り下る時の快味を思ふさ、早く頂上へ行つて滑り度い欲望で一杯になる。相當強い風の中を頂上に登りついて、僅か休んで直に滑降にさりかゝる。

實にはや何とも云えない。身は天上の樂園に飛び、心は一心に

前方の樹間に集中して、一瞬又一瞬、一刻又一刻遂に小屋の前に立つてホッと一息。

それから冷水澤出合迄も滑つたの滑らないのつて、自分では小屋から五分位かなあと考へて見たが、上り二時間近くかゝつて居るのだから、矢張り十五分や二十分位はかゝつて居るのかも知れない。

其夜奥野氏の顔で、定山溪温泉ホテルと云ふ實に立派な旅館に泊る。控間が六疊と三疊と二間だから豪勢なものだ。

又温泉たるや湯槽が澤山あつて胃腸に効くさか、胸に効くさか神経衰弱向きさか一々立札に書いてある。三人とも一通り全部這入つて、夫れぞれ持病を治したつもりになる。

奥野氏は按摩を呼ぶさ云ふので、後で熊さんと僕がやつて貰ふ事にする。

熊さんは左利きだったので左の肩が凝つて居るさ按摩さんが云ふ。

僕の番になつて肩の處へ指をあて、

「こりや一寸さも凝つて無い。揉まない方が良い。癖になります」さ云ふ。

隣で寝て居たベンちゃんがクス／＼笑ふ。折角生れて初めて揉んで貰ふので緊張して居た處、一寸自分ながら可笑しかった。

X X X X X

愈本日で札幌とおさらばだ。年末年始にかけて奥野氏夫妻には非常に御迷惑をかけた。

一日中色々土産物を買つたり、狸小路と云ふ札幌の浅草仲店通りを特に見物して、是れが狸小路かさベン、熊兩氏一寸變な顔を

して居る。一寸さも賑かで無い。正月の晝間だから無理も無い。午後芳賀氏の店に立寄つて色々スキーの修繕を頼み、午後四時五十五分發上り急行にて一路歸京の途に就いた。 以上

戦線だより

○松木謙三君より(十二月二十五日附 村尾君宛)

拜啓 本日、十一月十五日付御手紙難有拜見いたしました。針葉樹會の皆様の元氣な御言葉を賜りまして、感謝いたしてゐます。實は近々悪口を言つてやらうと思つてゐましたが、このお便りで少し鋒先を弱められました。

上陸以來、針葉樹會報を二度か貰つてゐぬので、或は針葉樹會は解散したのかと思ひました。毎月出來てゐるのに送らなければ、幹事は先輩に對する禮儀を失してゐる。もし毎月出せないなら針葉樹會員も骨抜きになつたわけだと思ひました。皆名前を揃へて手紙を貰ひましたのでやつと安心しました。(中略)

熊さんの送つてくれた、何とか名は知らぬが女の寫眞は壁に張りましたよ。一段と部屋が引き立ちました。又孫さんの燧の繪も張りました。いくら戦地でも女の寫眞ばかりじゃ、助さんに思はれますから。

是非時々お便りを戴き度いものです。實は此方も忙しいもので便りをせぬわけですが、まあ大目に見て下さい。本部に居るので普段は餘り彈には縁が薄いのですが、その變り仕事の多いこと、經理部は師團の衣、食、住の本家なんです、その中、食を除いて全部が僕の受持なんです。着いもの、使ふもの、建築、電力皆

です。軍隊の事だけでなく日本人の商人、新聞社、カフェーの事までやらねばなりません。何しろこの山の中では不便極りなします。〇〇北方の兵隊は困苦に耐えるさ云ふので、こんな邊鄙のところに廻されたんでせうが困ります。それでも今は冷凍魚が来ますよ。サンマの塩焼にカレイの煮付を食べましたよ。時には鶏や牛を見付けて来て、すき焼をやります。さてもたまらんね。戦地の方が食物はぜいたくかも知れませんが。併し部屋だけはひどいです。此處は大分南になりますので、蜜柑が出来ます。夜は霜が降りて寒くなりますが、日中は暖かです。日當で晝寝をしたらよいと思ひます。南京豆が澤山出来るさところで、毎日パチ／＼やつて食べてゐます。此の一ヶ月雨が降りません。毎日晴天です。澄みきつた青空です。二月の末から雨期に入るさうです。その時の道の悪いこと實にお話にならんさのことです。

丁度この半月間、蔣の冬期攻勢で全線に涉つてやつて来ました。何れも今迄日本軍にぶつかつた事のないさ云ふ中央直系軍です。なか／＼味をやりをるが、何處までも追かけて来る氣力がないので、かもです。二三日前から我が正面は總退却を始めました。やつてみたがさてもたまらんので、逃げだしたさか。我が軍は機を逸せず今や追撃戦をやつてゐます。遠く追拂つてお正月をするんです。松を切つて来たり、竹を見つけて来て松飾を初めました。なか／＼器用のものが居ります。

ハンちゃんに冷かされたが、戦地へ来て肥るなど生意氣ですが一貫目が一貫五百匁位肥りました。何しろ戦地は呑氣だからね。食ふこそ他考へませんよ。そして氣焰を上げて居ればよいんで

すから。併し上陸以來一度も寝たことのないことだけは自慢出来ます。恐らく寝たことのないものは、少いと思ひます。文明人じやないのかも知れませんが。

餘り悪口を言ふと手紙を貰へぬからこれ位で止めます。實際樂しみなのは手紙だけです。郵便物の到着した時の懐しさ。その度に僕のところはないかさ皆で集つて来ます。是非お見捨てなくお便り下さい。

ハンちゃんのところへ代表して貰つて送りますから、針葉樹會に披露して皆さんに知らせて下さい。敬具

中支派遣軍甘粕部隊本部氣付高谷部隊

松 木 謙 三

(編者)會報を送らないので大へん叱られて面目ありません。實は戦地に居られる方の分は、發行の都度お留守宅へ送つてをります。今度から戦地へも必ずお送りしませう。

〇鷹野雄一君より(一月十七日附 針葉樹會宛)

あけましてお目出たう御座います。

永い間ほんさに御無沙汰許りして、何んとも申譯ありません。どなた様も私の筆不精には、今度許りはほさ／＼おあきれになつた事と思ひますが、生れつきどうも手紙の書けない性分故此の度は何卒お許しの程お願い致します。

昨年冬の始め皆様からの懐しいお便りを受け取りました時はほんとに喜びの餘り何んと返事を書いたものやらと散々思案を致したのですが、どうも針葉樹會報にのせて戴く様な面白いお話もなく、あゝでもない斯うでもないさ思つてゐる中、年が新しくな

つてしまった様な譯で、多少大陸的になり過ぎた嫌ひがあるのですが、どうか皆様の御厚情によりましてお許しを得たいと虫のいゝお願ひを致してゐる次第です。

皆様さあの如水會館でお目にかゝつてから、丁度一年半、暮し方によつては相當長い様な氣が致します。一昨年十一月、海を越えて以來はづゝと中支の平野ばかりを歩き廻つて居ります。山西の山岳地帯も知りませんし、大別山系も盧山も知りません。只田圃とクリークの果てしない平野の討伐と警備です。山を見ないで暮した一年餘の今日は、も早や周りに山が見えなくとも物足らないと思ふ様な事はなくなりましたが、まれに山や雪の繪葉書でも見るさたまらない郷愁の様なものを覺えます。風雨にたゞかれて歩いたり、風がゴーンと吹きさぶ夜など、ふさ山にゐる様な錯覺を起してはつと事など矢張り今でもありますが、すべて思ひ出の中にほのかに山の香をしのぶ丈、所詮私は山には運のない男の様です。

近く又何處かへ出かけるのですが、今度は多少山の様なもの見える所なので楽しみにしてゐます。ヒマラヤの水河を踏んでから死にたい。そんな事を口にする手前にも、せめて死場所はいづれも山と名のつく様な處にしたいと思つて居ります。

大先輩中川さん始めペンちゃん、クマさんその他皆々様からお便を戴き乍らお禮も出さず、誠に失禮の極みですが何卒お許し下さい。面白いニュースのあり次第又お便りする事に致しませう。新聞等によりますと最近銃後皆様の御骨折も大變の事の様で、誠に御苦勞様の事と感謝致して居ります。嚴寒の折柄何卒十二分

に御健康に御留意の上御活躍の程お祈り申して居ります。尙柿原森脇、新羅諸君の御奮闘を祈ります。

甚だ簡単であります、先は右御無沙汰お詫びまで。

中支派遣軍土橋部隊氣付眞田部隊島田部隊鷹野隊

鷹野雄一

○新羅二郎君より(十二月廿九日附 村尾君宛)

隨分大勢の寄書拜見しました。お禮申上げます。針葉樹會連中にも御無沙汰してゐまして申譯ありません。愈二六〇〇年の印象的なお正月が後二日でやつて來ます。仲々お忙しい様で結構ですね。二ヶ月に亘る「陽チブス」もお蔭で全快、去る十四日に退院致しました。今では前より元氣になつた位です。(中略) 山行の話は全く羨しいです。又 *Schi Heili* の時がやつて來ましたが今年は金々駄目、又面白い *News* でも聞かせて下さい。坊やは元氣ですか?

中支派遣軍齋藤(彌)部隊佐々木隊次田隊

新羅二郎

山岳部報告 (昭和十四年十一月—十五年一月)

記 録

(1) 甲斐駒・仙丈(一一、二—五) 根本 林

新雪の南には感激したが道を違へたり、天候は良い方でなく印象は良くなかつた。

(2) 奥多摩茅倉尾根(一一、四) 清水

(3) 同 (一一、一〇) 鈴木

(4)三ッ峠山(一二、一七) 鈴木

(5)金峯山(一一、二五—二六) 日江井 他一名

昇仙峽から入ったが、御室泊りで金山へ下るコースはかなり強行であつた。山頂には雪五、六寸。久方ぶりの寒さにふるへ上つた。御室の小舎は破損甚し。

(6)富士山(一二、二—三) 大塚 宮城 根本

全山白氷に包まれた富士へ行つたが、人が多くてうるさい位。山頂の気温は〇下十八度で大したものであつた。歸途吉田で新聞記者の訊問?をうける。

(7)神樂峯スキー行(一二、二—二二) 岩崎 原

初滑りに出掛けた。すこしブツシュがあつたが痛快であつた。

(8)穂高瀧谷行(一二、一六—二八) 大塚 山田 佐藤(政) 根本
去年の十二月と本年三月散々な目にあつた今年は、また全く逆にあつて成功してしまつた。それは何十年來の好天のためで行く時は上高地まではスキーをもつたまゝ、天幕を張つてからも毎日の快晴に連續動き廻り遂に肉體的に消耗するさういふ冬山には全く見られぬ現象であつた。左に概略を報告しますが詳細は前號本文を参照して下さい。

十六日 出發

十七日 中ノ湯

十八日 德澤

廿一日 北穂高南峯寄りに天幕建設

廿三日 大塚、山田、瀧谷第四尾根へ。佐藤、根本は奥穂高ジヤンダルムへ。瀧谷班はこの日ツルム上にてピヴァー

クし翌日午後歸幕。

廿五日 大塚、根本第五尾根へ。山田、佐藤は涸澤槍へ。

廿六日 大塚、根本第二尾根北山稜へ。山田、佐藤第三尾根完登。

廿七日 引上、德澤へ。

廿八日 中之湯、歸京。

(9)乗鞍スキー合宿(一二、二三—三〇) 於乗鞍スキー小舎

参加者 岩崎 宮城(責任者) 深谷 林 高野 鈴木 清水
川又(部外) 但岩崎は廿六日より参加

豫定人数が減つて淋しかつたが、こちらも毎日快晴でいやにな

る位練習が出来た。新人の上達も素晴らしく、近來に無き上成績な結果を得た。尙全員廿五、廿九の兩日にわたり頂上を踏む

(10)野澤スキー行(一二、二二—二七) 小泉 他二名

(11)同 (一二、二三—二七) 船本 他二名

(12)遠見尾根より五龍岳(一二、三一—一、三) 先輩小谷部全助氏

船本

すごい混んだ汽車の御蔭で往きは遂にロハ、天気も良くて恵まれた山行であつた。

(13)石打スキー行(一、四—九) 林

(14)志賀高原スキー行(一、四—六) 根本

(15)土合スキー行(一、六—八) 久保

(16)志賀高原スキー行(一、八—一五) 原

(17)飯土山スキー越え(一、二—) 先輩 林俊介氏 岩崎

(18)野澤スキー行(一、二五—二八) 久保

消 息

太田又一君 東京へ御榮轉とならる。

(通信先) 日本橋區高島屋人事部氣付。

小林重吉君 一月十日入營。再度即日歸郷。

(町名變更) 豊島區椎名町三ノ一九七〇。

佐々木誠君 一月十日入營さる。

麻布區龍土町、近衛歩兵第五聯隊第二機關銃中隊
第一班。

榎本直司君 一月十日入營さる。

千葉縣習志野、騎兵第十六聯隊第四中隊第四班。

堀岡清君歡迎針葉樹會 十月卅一日(火)如水會館

出席者(會員) 中川、吉澤、増山、堀岡、林、小林、望月、佐

々木(部員) 日江井

突然の集りで通知徹底せず、參會者少なくて残念。時局談話、大陸談話、石炭セメントの話等等、アラさんマゴさんの掛合話をうかう。

柿原謙一君を迎ふる會 十一月六日(月)如水會館

出席者(會員) 吉澤、村尾、増山、柿原、林、小林、望月、佐々木(部員) 日江井

午後突然、見習士官柿原殿より電話あり、急ぎ増山さんの御助力を得てさも角も八名の岳友が、神田の例の處に集ひ、謙ちゃんを圍んで積る話に花を咲かせた。謙ちゃんは見違える様に立派な皇軍將校の卵となられ、吾々も大いに肩身が廣いさ云ふもの。地方の會員諸氏何卒御安心下さい。

針葉樹會例會 十一月廿九日(水)如水會館

出席者 常盤敏太教授(會員) 中川、吉澤、村尾、高木、金田手塚、高見、増山、林、柿原、望月、佐々木(部員) 岩崎、原大塚、日江井、宮城、小泉、山田、久保、佐藤、根本、高野、小柳、鈴木、松下

木村惠吉郎教授の後任として、新たに部長となられた常盤教授を招待した。山に非常に理解あり、又現在の山岳部の雰囲気をよく知つて居られる同教授を迎へたことは、現役と共に喜びに堪えない次第である。

尙今晚は大阪の高木さん、上京轉勤となられた高見さん、軍服姿の謙坊等珍らしい顔が見え、新しい部員諸君の元氣な姿も多數現はれて久々の盛會であつた。

昨秋刊行の「針葉樹第十號」代金未納の方は、決算の都合も有之甚だ御手数乍ら来る四月十日迄に左記へ御送金下さいますようお願い申し上げます。

下谷區中根岸町四十一

送金先 日江井 正 己

山岳部三月の計畫

本年三月の計畫は、先づ山田君以下四名が横尾本谷から南岳に幕營を行ひつゝ、槍ヶ岳及小槍をねらひ、船本、日江井兩君の徳澤小屋生活、ビギナーは宮城君リードのもとに八方尾根の黒菱スキー小屋で合宿、各班三月十日出發しました。